

80. 江戸時代後期における下級武士イメージの再構成

東京農業大学国際食料情報学部 非常勤講師

戸森 麻衣子

概要

本研究は、江戸時代後期の下級武士が、当時の社会構造の中でどのような位置にあり、いかなる役割を果たしていたのかについて検討し、従来からのイメージを見直して新たな総合的評価を示すことを目的とした。

下級武士の関係史料を、自分の視点を基準に広く収集して分析を行った。福島県歴史資料館、沼津市明治史料館、秋田県公文書館、越前市史編さん室、福井県文書館、松本市文書館、松本城整備課、栃木県立文書館、横浜開港資料館、群馬県立文書館、茨城県立歴史館、財団法人江川文庫など史料所蔵機関での調査を実施した。

結果、徳川家の下級武士である御家人・地役人に関しては、幕府政策の改革・改善において果たした各種の役割を発見することができた。大名家の下級武士については、下級武士である足輕・中間層とその上層の間を隔てる「壁」の内容を丁寧に分析することによって論点が整理できることが分かった。そして旗本の家臣に関しては、江戸の旗本屋敷とその知行所の間で交わされた往復書簡の分析等から旗本家臣の具体像が明らかになった。

今後、(仮題)『江戸時代後期の下級武士』と題して、本研究の成果をまとめた書籍を刊行する予定である。収集した膨大な史料の分析に時間を要しているため2027年の刊行を目指している。

私は大学・研究機関の常勤職員でないため研究資金の獲得が難しく、各地の史料所蔵機関へ出向いての調査が進まないという悩みを抱えていたが、今回、三菱財団の助成金を受けて、数年来計画していた史料調査を実現することができた。これにより、総合的な研究を完成させるための道筋をつけることもできた。このようなチャンス을 くださった三菱財団には深く感謝しております。

背景および目的

本研究は、江戸時代後期の下級武士が、当時の独自の社会構造のなかでどのような位置にあり、いかなる役割を果たしていたのかについて検討し、そのうえで従来の「下級武士」イメージを見直して総合的な評価を示すことを目的としている。

武士社会には、最上層の将軍・大名から最下層の足輕・同心・中間まで重層的な序列の構造が存在したが、江戸時代後期にはその序列の構造が揺らぎ、下級武士から昇進して幕府・藩の政治の中枢を担うような人物が現れていった。また、武士身分と百姓身分とを行き来する存在も広範にみられた。武士身分というものが実際は流動的であった点は学界で共有されている知見だが、そのように江戸時代後期に下級武士層のありようが変化し、身分制度の枠組みそのものにまで影響を及ぼすようになったメカニズムが具体的に明らかになっているとはいえない。それは、下級武士層についての、社会的機能に則した分析や整理が不十分であることが主な原因であると考えている。

下級武士が立身して政治的ヘゲモニーを握ることについて、従来型イメージの形成に大きく影響してきたのが幕末期の薩摩藩・長州藩といった西国雄藩の事例である。彼らの才能が藩主の目に留まり、政治的活躍の機会を与えられ、遂には明治維新の変革を成し遂げる主体となったと語られてきた。しかし、藩主の慧眼は後付けされた理由にすぎず、立身出世の糸口を引き寄せたとされる「才能」や、才能の開花を可能とさせた社会的条件が検討されなければならない。また、こうした西南雄藩の事例は維新変革につながったことから過大評価されがちだ

が、実際のところこうした現象は同時期の幕府・諸藩で広く見られ、江戸時代後期の政治的困難を乗り越える原動力となっていた。下級武士の役割を社会構造のなかに位置付けることは、幕藩制後期の時代像をより正確に理解するために不可欠であると考えている。

方法

徳川家に属する下級武士、大名家（藩）に属する下級武士、旗本家の家臣、公家・寺社などに属した下級武士、一時的に武士身分を獲得して活動していた百姓など、多様に存在した下級武士のそれぞれの特徴を見通したうえで、上記の研究目的を実現していく。先行研究を参照して諸事例に対する理解を深め、論点を整理していくのはもちろんのこと、自らの視点に基づいて下級武士の関連史料を収集・分析し、下級武士の実像を解明していった。

史料収集については、既に書籍に翻刻されている史料は複写して収集し、現物の史料については史料所蔵機関へ出向いての調査を実施してデジタルカメラ撮影した。研究期間中に、福島県歴史資料館、沼津市明治史料館、秋田県公文書館、越前市史編さん室、福井県文書館、松本市文書館、松本城整備課、栃木県立文書館、横浜開港資料館、群馬県立文書館、茨城県立歴史館、財団法人江川文庫での調査を行った。計画段階から意図していた通り、多様な下級武士の姿を包括的に捉えるために必要な諸事例にかかる史料の収集を行うことができた。

結果および考察

身分秩序を軸とする武士社会にあって下級武士層が存在感を示す機会があるとすれば、行政役所などでの実務能力や関係者等との調整力ではないか、そして下級武士層の実務能力向上により行政システムは成熟し、大きく社会の進展をもたらしたのではないかというのが私の仮説である。調査の結果、まさにこの仮説に即した史料が多様な情報として残っていることが確認できた。

①徳川家に属する下級武士（御家人・地役人）

拙著『江戸幕府の御家人』（2021年）刊行段階では未発見だった御家人・地役人などの関係史料を収集した。『江戸幕府の御家人』で示した結論に変更はないが、御家人の職務のありかたや家の問題に関する理解をさらに深めることができた。また、彼らが幕府政策の改革・改善において果たした各種の役割を発見できた。地役人に関しては、居住地において行われた経済活動や文化活動が重要な意味を持っていたことが分かった。

②大名家（藩）に属する下級武士

大名（藩）の家臣団は、家による制度の差異が大きく、「下級武士」の範囲を定義することさえ困難であるが、足軽・中間層とそれより上位階層を隔てる「壁」の内容を丁寧に分析することによって整理できることが分かった。また、従来「下級武士」と呼ばれてきた存在について、経済的な貧富ではなくその身分的地位を理解したうえで評価することが不可欠であることを確認した。史料は秋田藩の足軽文書を中心に収集した。比較研究のための軸を一つ確保できたことにより、各藩の下級武士について理解しやすくなった。

③旗本の家臣

特に史料収集の成果が大きかったのが、旗本の家臣関係である。主家である旗本家に伝来した文書から旗本家臣の状況を抽出できたほか、旗本知行所関係文書（旗本代官や知行所名主文書）では、江戸の旗本屋敷との往復書簡に上質な情報が含まれており、旗本家臣の具体的様相が判明した。このように、位相を異にする史料を複数、収集できたので、多様な旗本家臣の姿を構造的に描き出すことが可能となった。

上記のように、下級武士に関する多種・多様な史料を収集して総合的な分析を行うという目的に照らしての史料収集は目標を達成した。しかし、諸事例に接すれば接するほど、属する組織による下級武士の様相の相違点が明らかになってきた。それをどのように整理・把握して総合化するか、課題もはっきりしてきている。さらに分析を継続し、完成に向かっていくつもりである。

なお、（仮題）『江戸時代後期の下級武士』と題して、本研究の成果をまとめた書籍を刊行する予定である。2027年の刊行を目指している。

（完）